

平成 29 年度「社会学」修了試験

平成 30 年 1 月 15 日実施

注意事項

1. 筆記用具の他、教科書、自作ノート、自筆意見シートの持ち込みを可能とする。その他の持ち込みは、不正行為とみなす。
2. 回答は、別紙回答用紙に記入すること。
3. すべての回答用紙に、学籍番号と氏名を記入すること。
4. 回答用紙が足りない場合は、裏面を利用すること。

問題

- 問 1 本能によってのみ生きるのではなく、「社会的な存在」として生きることについて、社会学の講義内容を踏まえて、反対意見も考慮に入れながら、自分の考えを論じなさい。(70 点)
- 問 2 社会学の講義全体を通してあなたが学んだこと、あなたが考えたことを自由にまとめなさい。(30 点)

以上

問 1 の回答例

「社会的存在」とは、何らかの知恵や仕組みによって共同で生活する存在である。その点、多くの動物もまた社会的存在であると言えるが、動物はそうした共生の仕組みが本能によって定められているのに対して、人間は自らで作り出していかなければならない。

この点について家族を例に考えてみる。私たちは、なぜ結婚して家族を作るのか。近代以前では、結婚するのは子孫を残すためであり、つまりは家を守るためであった。子孫を残すという点では、動物と同じである。一人ひとりの人間よりも家族の存続が大切であり、子どもができない場合は、平気で離婚されていた。そこでの人生の物語は、「私が生きているのは、家を守るため」というものであった。今でも、先祖代々の土地を手放そうとしない人があるのは、そうした物語の名残であろう。

近代の家族は、愛情に基づいて結婚することになった。とはいえ、そこでも家族の目的

は、目的は愛情をもって子どもを育てることであり、母性愛を発揮する専業主婦が誕生したのも近代に入ってからである。子どもを産み育てることは、近代国家の繁栄に欠かせないことであったからだ。かつて、「女性は子どもを生む機械」と失言した政治家がいた。

社会学によれば、私たちは、自らの「人生の物語」を作って生きている。そして、そうした人生の物語の材料となるのは他者の視線である。自分自身について、いろいろな人からいろいろなことを言われ、その結果、自分とはどういう存在なのかという自己意識ができあがる。近代の家族の物語は、父親としての男らしい役割、母親としての女らしい役割を果たしているかどうかが決り手であった。したがって、一人ひとりの人間の個性を無視した社会的な役割に基づいた視線が支配しており、社会の期待から外れるような人間（男らしくない夫、女らしくない妻など）は苦しむことになった。

しかし、現在の世の中は、「男女平等」になり、共働きも当たり前になっている。外で稼ぐ男性が上に立つという家族環境ではなくなっており、外で働く父親と家事をする母親というジェンダー役割に縛られなくなっている。したがって、今日の家族は、社会から与えられた役割にもとづいて形成されるものではなく、お互いが社会の役割にとらわれることなく、相手の個性を尊重し、「共感的コミュニケーション」を重ねることで、お互いの個性を活かせるような新たな役割と家族を作ることが大切になっていると言える。これが、家族という「わたしたちの物語」を作っていくということである。

*

しかし、本当に家族だけで「わたしたちの物語」をつくって良いのだろうか。たとえば、「不満なことがあれば、我慢することなく、自己主張しよう。家族のなかでコミュニケーションして納得できればそれで良い。私たちのことを批判するよその人間は無視しよう」という家族の場合、外の社会と問題を起こすことなくやっていけるだろうか。

極端な例を挙げれば、家族全員が音楽が好きだからといって、近所への騒音の問題を考へることなく、大音量で音楽を流せば、当然問題になる。それに対して、「わたしたちの家族が何をしようが勝手だ、社会のルールにしばられるのはおかしい」と主張しては、世の中が成り立たない。

*

したがって、社会の常識や役割にとらわれることなく、自由に「わたしたちの」物語を作っていくことが大切だからといって、どんな社会の常識や役割も拒否して良いわけではない。では、どんな社会の常識や役割、他者の視線なら拒否して良いのか。差別や偏見に基づくルールや役割は拒否すべきだし、自分たちの存在そのものを否定するような他者からの視線も拒否して良いはずだ。家族は何としても守るべきである。

しかし、多くのルールや役割は、不特定多数の人びとが集まって生活している今日の社会の秩序を守るために不可欠なものである。もちろん、そうしたルールや役割のなかにも、「間違っている」と感じるものがあるかもしれない。あるいは、そう感じる自分たちが間違っているのかもしれない。そこで、家族外との「弱いつながり」も大切にして、理性的

に議論を行いそうしたルールや自分を変えようとする態度が必要である。そうした理性的な態度を身につけるためにも、今日の家族は、共感的コミュニケーションを核として形成されるべきであると考えます。